沖縄の戦跡を訪ねて

美しく
花開くための
そのかくれた根の
たえまない
営みがあるように
私達の
平和で
心静かな日々には
この地に散った
あなた達の
深い悲しみと
　苦しみが
そのいしずえに
なっていることを思い
ここに
深い祈りを
捧げます

「糸満市米須　島根の塔」

（千葉県・日本寺修徒）　平山是昭

糸満市・魂魄の塔（筆者近影）

沖縄の那覇空港に着くと、突然に民間の旅客機と異なる鋭いエンジン音が耳を衝いてきた。ジェット戦闘機のものである。那覇空港は、航空自衛隊・海上自衛隊の航空部隊が使用する軍民共用の空港なのである。（第十一管区海上保安本部も航空基地として使用している）

先月の中国の原子力潜水艦の領海侵犯事件の時には、この那覇空港からの対潜哨戒機が追跡行動をしている。まさに沖縄は、日本の国防の最前線基地となっている。

その沖縄は、今から五十九年前（昭和二十年三月から六月まで）の太平洋戦争の時、民間人を巻き込んだ悲惨な陸上戦が展開された戦跡でもある。太平洋戦争終結六十周年を来年にひかえて、現宗研では、十二月六日・七日の一泊二日にて沖縄での現地研修会を研究員等十二名で開催した。それに伴い、現地での案内役を私（平山是昭）が仰せつかったわけである。

沖縄戦戦没者第五十回忌の慰霊を発願して、沖縄での戦跡の巡拝をするために沖縄に渡ったのが、今から十年前の平成六年の九月だった。そして、新たな戦没者慰霊の旅（南洋諸島）の準備の為、今年の八月に内地（本土）に帰ってきたのであるが、沖縄で戦没者供養を続けながら、戦争のこと平和のことを学んできた十年であった。沖縄本島はもちろんのこと、離島を含めて戦跡や各地に建立されてある慰霊塔碑を巡り、法華経・お題目をもって慰霊し、少しくそれらを記録にまとめたり、ボランティアで今なお地中（壕に埋もれて）にある遺骨・遺品の収集や、遺品（認識票・万年筆・印鑑・剃刀等）を遺族を捜して返還するお手伝いをこの十年の間行なってきていた。その間、そういう私のことが新聞やテレビに出ることが何度かあった。それゆえに今回の現地研修の案内役の白羽の矢が私に立ったということである。又、沖縄戦を通じて今次大戦（太平洋戦争）のことを少し学ぶことも出来たわけである。それは、沖縄戦にいたるまでの各地での玉砕戦（昭和十八年五月のアッツ島から始まり、二十年三月の硫黄島まで）のことであり、特攻隊（航空・海上・海中）のことであり、疎開船対馬丸（つしま）に代表される戦時遭難船舶のことであり、空襲・原爆のこと等

である。そして、沖縄戦の生き残りの人々はもちろんのこと、多くの人々と知己を得て、多くのことを教えていただいた十年であった。

沖縄戦の終了する六月、十五歳だった金城（きんじょう）さん（戦後は那覇でホテル経営）は、家族での集団自決から奇跡的に生き残り、戦後は沖縄戦の戦没者の慰霊と記録の整理に尽力。戦後すぐ、小学生だった国吉（くによし）さん（那覇市で消毒会社経営）は、遊び場にした防空壕の中で沖縄戦で亡くなった人の遺骨を見た体験から、何千体という遺骨を埋もれた濠の中から掘り上げ続け、古波津（こはつ）さん（薬剤師で戦後は那覇市にて薬局経営）は、学徒出身の陸軍の航空兵で自身も東京上空においてB29に体当たりして撃墜し、沖縄戦の時は、戦友の沖縄特攻を徳之島上空まで護衛した経験を持って沖縄で生活しておられる。まだまだたくさんの人たちから、沖縄戦・太平洋戦争のことを生（なま）の話として聞かせていただいた。

これらの人たちにとって、先の戦争のことは、けして遠い過去の話ではないのである。しかしながら、今の若い世代にとってはどうであろうか。〝戦争のことを知らない〟から、〝平和のことが語れない〟というのが本音の現実ではなかろうか。日蓮宗の若い教師においても例外ではないのではないだろうか。現宗研では、沖縄の戦跡を巡ることにより当時の戦争のことを学び、少しでも〝平和〟を語れるようにと願い、沖縄での現地研修を立案し、実施したわけなのである。

「嘉数高台（かかずたかだい）にて」

『背を丸め　深く倒せし　操縦桿
　千万無量の　思い今絶つ』

「平良市　神風特攻龍虎隊碑」

那覇空港に現地集合した研究員一行は、最初の研修地である嘉数高台に向かった。

沖縄本島での陸上戦は、昭和二十年(一九四五)の四月一日に、米軍が本島中部の海岸に上陸することによって始まった。それを予想していた日本軍守備隊は、細長い沖縄本島を横切る何本かの丘陵地帯を守備隊の防禦線として上陸軍と戦う布陣を敷いた。その最初の防禦線が嘉数高台であった。それゆえに、ここでの戦闘が相当な激戦になったのである。十七日間の烈しかった戦闘の一端を、今もこの高台に残る陣地壕やトーチカが物語ってくれている。この地区では、関西出身の兵士が多く戦死されているので、この地に『京都の塔』が建立されてある。『京都の塔』に隣接して、嘉数地区の住民犠牲者の為の慰霊の塔『嘉数の塔』が建立されている。地区の人々は、日本軍守備隊の近くにおれば安心と考え、本島の北部または南部への避難(疎開)をせずに地区にのこり、陸上戦に巻き込まれてその大半が犠牲になってしまわれたのである。戦後の調査で、この集落の全戸数百六十二戸の三分の一にあたる五十四戸が一家全滅になってしまったことが判明した。

宜野湾市嘉数高台・米軍本島上陸地点日本軍トーチカ

またこの地には、韓民族出身沖縄戦戦没者慰霊の『青丘之塔』も建っている。この嘉数の攻防戦では、朝鮮半島から強制連行され、軍夫として、陣地構築や武器弾薬の運搬に使役された朝鮮半島の人たちからも多く犠牲者を出した

からである。なお、朝鮮半島の人たちの沖縄戦での犠牲者数は、現在でもはっきりしていない現状にある。

伊藤立教現宗研主任を導師に、『京都の塔』前にて法華経・お題目をもって、沖縄戦全犠牲者に回向した後、この高台の中心にある展望台に登った。

展望台からは、東シナ海が遠望出来る。その海こそが、太平洋戦争中の航空特攻作戦の特攻機のその大半が突っ込んだ海なのである。まさに「特攻の海」である。（資料I参考）

また展望台の眼下には、米軍の普天間飛行場が一望できる。普天間飛行場は、アメリカ海兵隊のヘリコプターを中心とする航空部隊の飛行場である。この飛行場は、宜野湾市の全面積の約四分の一を占めている。

沖縄は、昭和四十七年（一九七二）に日本に復帰するまで、米軍の極東における重要軍事基地としてあった。しかしながら、復帰後も沖縄はその位置を変えていない。日本全国の米軍専用基地の75％が沖縄に集中し、全県土面積の約11％を占めている。本島だけで言えば約20％である。この戦争による負の遺産の為に、戦後沖縄の健全な経済発展が阻害されてきたと言っても過言ではないのであり、沖縄は復帰後も「米軍による占領」状態にあるのである。

本年八月十三日、その普天間飛行場所属の大型輸送ヘリコプターが、飛行場に隣接したところにある学校（沖縄国際大学）に墜落炎上したニュースは記憶に新しいところである。今この普天間飛行場を沖縄県内に移設するということでその計画が進み、それはそれで移設先周辺に住んでいる一般県民の安寧な住民生活を脅かす新たな問題となっているところである。

時間的な制約で、ヘリの墜落現場を直接見学することはできなかったが、一目瞭然にして、市街地に囲まれた飛行場（軍事基地）がいかに危険窮まりないかを研究員の誰もが実感したことであった。

基地の完全撤去以外に真の解決策が無い、というのが本当のところであろう。

「南風原文化センターにて」

『恨むやいくさ　いちゃ忘やびが（ウラムヤイクサ　イチャワシヤビガ
御万人ぬ袖に　降たる涙や』　ウマンチュヌスデニ　フタルナミダヤ）

「与那城町屋慶名　慰霊塔」

『戦世の哀り　忘て忘らりみ（イクサユヌアワリ　ワーテワーラリミ
子孫に語ら　命どう宝』　クワンマガニカタラ　ヌチドウタカラ）

「西原町翁町　西原の塔」

南風原と書いて「はえばる」と読む。文化センターの裏は、黄金森(こがねもり)、地元の人たちは「くがにむい」と呼ぶ丘である。この丘こそが、「ひめゆり部隊」で有名な女子学徒たちが、従軍看護婦の助手として働いた沖縄陸軍病院壕が掘られた〝悲泣の丘〟である。文化センターの大城(おおしろ)館長の案内で、沖縄陸軍病院壕での様子を生存者の証言を元にして説明していただいた。ここでの話は、翌日の「ひめゆり平和祈念資料館」を

南風原文化センター・陸軍病院壕の病室（再現）

見学するにあたって大いに参考になった。

また、南風原町の戦後調査によると、沖縄戦当時住んでいた住民の約二人に一人の割合で沖縄戦の犠牲者が出たことが判明した。軍隊と行動をともにした人たちに犠牲者が多く、軍隊と離れて行動した人たちは犠牲が少なかった。大城館長の「軍隊は住民を守らなかった」と言った言葉が重く響いた。さらに、沖縄の独特な送葬儀礼についてもほんの少しだけだが説明を受けた。

この後、文化センターの図書室で、私(平山是昭)の「戦地沖縄で戦没者供養を続けて」と題しての講演を行なった。(資料Ⅱ参照)

研究員からは、沖縄独特の宗教状況についての質問等も出たが、時間がなく深く話し合うことができなかったのは残念であった。これについては、いずれ機会があれば稿を変え述べてみたいと思っている。

「夕食は沖縄芸能を見ながら」

夕食は、宿泊先のホテルから徒歩五分の所にある、国際通りの〝地酒(あわもり)と琉球料理と舞踊〟の店であった。

沖縄戦の暴風は、沖縄県民の尊い命ばかりでなく、沖縄の独特の文化をも破壊しつくしたのである。ここ二十年ぐらいでようやくそれらを取り戻しつつある現状にある。紅型(びんがた)と呼ばれる染色、芭蕉布(ばしょうふ)や花織(はなおり)といった織もの、組踊(くみおど)りに代表される琉球舞踊等々である。

今、色鮮やかな紅型の衣装を身にまとい、三線(さんしん)と太鼓が奏でるゆったりとしたリズムで舞われる琉球舞踊の中に、本来の〝沖縄の平和〟を希求する沖縄県民の心を見る思いがしたのである。

「南部戦跡を巡って」

『ひねもすを　とどろとどろと　潮騒の
声をまくらに　ここだくも
眠れる霊の　夢まどかならむ』
「伊江村西江前　芳魂之塔」

『洞窟に　傷病みとりし　乙女らと
今靖かれと　ともに額ずく』
「豊見城村　野戦病院患者合祀碑」

二日目の日程は、現地視察として、南部の慰霊塔碑巡りである。

那覇のホテルから南部戦跡に行く途次、沖縄独特の亀甲墓(かめこうばか)を見学した。亀甲墓はまたの名を門中墓(もんちゅうばか)とも言う。門中とは一族郎党のことである。少ないところでは数家族、多いところでは数百家族の者たちが、死後同一の墓に入る。だから、亀甲墓は大きい。今世に生きて生活している家よりも墓のほうが大きいし高価であるといった話が沖縄では普通に聞ける。しかしながら、門中墓は多くの家族(男の人数分)で経費を出し合うのでかえって合理的でもある。

戦前からある亀甲墓(門中墓)は、その大きさゆえに沖縄戦の時、住民の避難壕や日本軍守備隊の陣地がわりに使用された歴史をも持っているのである。

糸満市・亀甲墓全景

糸満市・ひめゆりの塔（創建当初の碑）

糸満市・ひめゆりの塔（現在の碑）

次は、いよいよ慰霊塔である。『ひめゆり』の前に『白梅（しらうめ）之塔』に行く。『白梅之塔』は旧制県立第二高等女学校の沖縄戦戦没者慰霊碑である。沖縄戦時の女子学徒隊は、すべて〝ひめゆり〟だと思っている人が、本土の人々の大部分ではなかろうか。だが〝ひめゆり〟は第一高女と女子師範学校であり、沖縄戦時の女子学徒隊は〝ひめゆり〟を入れて全部で七校の六部隊で、従軍看護婦の助手として従事した。男子学徒隊は、県立第一中学校など九校の十六部隊（鉄血勤皇隊・通信隊）である。『白梅之塔』は『ひめゆりの塔』とさほど離れてはいないが、そこを訪れる人はほとんどいない。もちろんおみやげ屋や食堂などはない。ご回向した後、『ひめゆり』に移動した。さすがにここは、朝の九時だというのにすでに団体観光客や修学旅行の中高校生たちでごったがえしており、塔前でのご回向もままなら

ぬほどであった。『白梅之塔』とは全く対照的であると苦笑いしたくなる。それでもご回向をして、「ひめゆり平和祈念資料館」に入る。

資料館の中では、ひめゆり部隊の生き残りの人たちが、平和の語り部として、入館者に自身の戦争体験等を話して聞かせている。「沖縄戦は本土決戦のための時間かせぎであった」との説明を聞く。まさにそうであった。沖縄の日本守備隊の抵抗のはげしさが、米軍をして、広島・長崎への原爆投下を決心させたとも言われている。

糸満市・本島最南端の海岸（沖縄戦最後の集団自決地）

今、「ひめゆり平和祈念資料館」は大きな問題に直面しているという。それは〝語り部〟の確実なる高齢化の問題である。〝語り部〟の後継者問題である。戦争体験者から戦争非体験者にバトンタッチする難しさである。やはり、平和の問題は人材の育成と切っても切れぬ関係があるのである。

つぎは、『魂魄の塔』である。この塔のすぐ後ろの海岸（米須海岸）は、沖縄戦末期に米軍に追いつめられた日本軍・沖縄県民（女子学徒も）の多くが自ら命を断った、慟哭の海岸・海である。

『魂魄の塔』は、沖縄戦終了後まもなく、この地にのざらしになっていた軍民日本人犠牲者の遺骨（二万体）を集め納めた納骨堂であり、二十一年二月二十七日に建立された。沖縄本島南部の各字に建立されている「慰霊塔碑」のほとんどが、ほぼ同じように納骨堂として建てられている。

この『魂魄の塔』に隣接して金城和信氏の胸像が建立されている。

この金城和信氏が、『魂魄の塔』を建てられた人である。氏は二人の娘さんをひめゆり学徒隊で亡くされており、その鎮魂・慰霊の碑を同年四月五日に建立された。それが『ひめゆりの塔』である。さらに続けて四月九日、氏は『健児の塔』を建てられた。

現在『ひめゆりの塔』は、ひめゆり学徒隊（女子師範・第一高女）の慰霊碑になっており、『健児の塔』は男子師範の慰霊碑になっている。いや、正確に言えば建て替えられていると言ったほうがよい。これは、けっして金城和信氏の本意ではないのである。それによって、前述の『白梅之塔』のような現状になっているのである。

糸満市・金城和信氏胸像

金城和信氏は本来、沖縄戦で戦没された全ての女子学徒のためにと『ひめゆりの塔』を建立されたのである。ゆえに、『健児の塔』は、沖縄戦で戦没された全ての男子学徒のために、そして、『魂魄の塔』は、沖縄戦で戦没された全ての沖縄県民のためにとの思いをこめて、建立されたのである。

尚、金城和信氏は、当時の身延山の法主猊下から、沖縄戦戦没者慰霊の為の大曼荼羅ご本尊をいただき、自宅におまつりして拝まれておられたと聞いている。次は、その『健児の塔』である。『健児の塔』は、沖縄戦の組織戦の最終玉砕地である摩文仁（まぶに）にあり、一帯が平和祈念公園になっている。

『健児の塔』へのちょうど入口のところに、南無妙法蓮華経のお題目塔がある。沖縄戦戦没者第三十三回忌の折りに建てられた「慈厚院日勇

上人」の慰霊碑である。日勇上人とは、沖縄守備隊第三十二軍の参謀長(実質的な指揮官)であった長勇陸軍中将のことである。昭和二十年六月二十三日、第三十二軍司令官牛島満大将と長参謀長が、摩文仁台上の壕の中で自決することによって、日本軍の組織戦が終了したのである。沖縄県では、この六月二十三日を以て「慰霊の日」としている。

『健児の塔』は、先に述べた如く、金城和信氏が、戦後男子学徒の慰霊碑として建てたものである。男子学徒隊は、上級生の鉄血勤皇隊は一般兵士となり、銃火器を手にして敵兵と戦ったのである。その中には、急造爆雷を抱えて敵戦車に飛び込むといった現役の兵士顔負けのことまでした者もいた。そして下級生達は、通信隊員として伝令等になって戦場を走り回った。そして、多くが戦死した。(資料Ⅲ参照)

研究員は、長い年月の間風雨にさらされ、彫られた文字の判読もままならぬ、本来の『健児の塔』に回向し、その後声もなく男子学徒達が自決した自然壕の入口でしばしたたずむばかりでいた。

糸満市・国立沖縄墓苑

摩文仁の丘の上には、各県(一部は他の霊域に)の慰霊塔碑が林立している。各都道府県の慰霊塔碑は、終戦五十周年を機に整備されたものが多い。ちょうどそれらの中心に『国立沖縄墓苑』がある。戦後すぐに収集されて沖縄各地の納骨堂(慰霊塔)に納められていた戦没者の遺骨が、その後この墓苑の納骨堂に移され納められている。又今でも遺骨収集で発見された遺骨は、日を決めてここに納められることになっている。

研究員一同は、この墓苑に香華をたむけ、読誦・唱題をもって、沖縄戦戦没者慰霊・世界平和を祈願した。

糸満市・「平和の礎」と「平和祈念資料館」

具志頭村・具志頭城跡内の慰霊碑

各県の慰霊塔碑が、終戦五十周年を機に整備されたと記したが、その終戦五十周年の時に平和祈念公園内に建てられたのが『平和の礎(いしじ)』である。『平和の礎』には、沖縄戦に斃れた全ての人々(日本・韓国・北朝鮮・台湾・米国・英国)の名前が刻銘されているのである。その数は二十万人である。十年経った今でも、毎年追加刻銘がなされている。それぐらいに沖縄戦は複雑なのである。

次が、最終研修地、摩文仁から十分ほどのところの、具志頭(ぐしかみ)城跡である。この海に面した城跡は、日本

軍が陣地を構築して、頑強に米軍と戦った激戦地であった。ここに、山梨県の『甲斐之塔』と高知県の『土佐之塔』が、建立されている。昭和二十八年の六月に山梨県が慰霊塔を建てたのが、都道府県関係の慰霊塔碑建立の嚆矢となった。

具志頭城跡の東側には、太平洋が広がっている。この日は晴れて、さすがに沖縄である。十二月だというのに汗ばむばかりの陽気である。海もゆったりとしておだやかで、南方独特の真っ青な色をしている。まさに平和そのものの景色である。

しかしながら、今この時、世界の各地で一般住民を巻き込んだ戦争・紛争・テロ・圧政による虐殺等が起こっているのである。

今あらためて、多くの想いを残して戦没された諸霊に思いをはせる時、日蓮宗僧侶として、真摯に戦没者慰霊(過去への問いかけ)をし、立正平和運動(未来への働きかけ)にも取り組まねばと自分自身も考え、他の各聖、殊に若き教師の方々がそうあって欲しいと念願して筆を擱くものである。(平成十六年十二月)

沖縄の南の果の岩蔭に
今は静かに眠るらん
戦に果てしその身の心中は
如何に無念と思ひこそすれ
合田輝明行年二十九才

年老いて日夜心にかかりけむ

遠く離れし此の島に
再び歩む親心
受取り給え祈りまつらむ
母合田あさ七十八才
昭和四十年晩秋

「糸満市宇江城　供養歌碑」

参考資料Ⅰ（写真集『カミカゼ』他より平山是昭が作成、資料Ⅱ、資料Ⅲも同様）
攻作戦戦没者数

航空特攻（爆装航空機による艦船攻撃）

	昭和19年10月～20年３月			昭和20年２月～20年８月		昭和20年８月
	蘭印	比島	硫黄島	九州南方	沖縄方面	本州周辺
陸軍航空隊	39名	253名			1022名	10名
海軍航空隊		438名	45名	396名	1872名	67名

舟艇特攻（爆装小型艇による艦船攻撃）

	昭和20年１月～20年５月	昭和20年３月～20年５月
	比島方面	沖縄方面
陸軍海上挺身特攻	100名	141名
海軍震洋特攻	130名	154名

水中特攻（人間魚雷による艦船攻撃）

	昭和19年11月～20年６月		昭和20年４月～20年８月
	南洋諸島	硫黄島	沖縄方面
海軍回天特攻	33名	10名	37名

水上特攻（戦艦大和を旗艦とした艦隊）

	昭和20年４月７日
	沖縄突入途次
司令部員(大和同乗)	242名
戦艦大和	2498名
巡洋艦矢矧	446名
駆逐艦朝霜他	528名

参考資料Ⅱ

塔碑建立年度別集計表

沖縄・日本・世界の動き	建立年	市町村自治体	他都道府県	軍隊・遺族会	同窓会・職域	県遺族連合会	個人供養碑	他	計
	～昭19	16							16
20.6.23　日本軍の組織戦終了 20.8.15　ポツダム宣言受諾	昭20～昭24	22		5	5	2	1	35	
25.6.25　朝鮮戦争勃発 26.9　対日講和会議 日米安全保障条約調	昭25～昭29	65	2		7	6	2	5	87
31.12.18　日本の国連加盟	昭30～昭34	51		5	4	1	2	1	64
36.11.11　沖縄県による大規模遺骨収集	昭35～昭39	26	14	5	6	1	6	5	63
40.2.7　米の北爆開始（ベトナム戦争） 40.4.9　慰霊の日を6月23日に	昭40～昭44	22	29	6	2	5	9	4	77
47.5.15　沖縄の日本復帰 48.1.27　ベトナム和平協定調印	昭45～昭49	18	2	7	2		12	8	49
50.6.12　平和祈念資料館開館 52.6　沖縄戦戦没者第33回忌 54.2　国立戦没者墓苑建設	昭50～昭54	5	2	22	3		17	4	53
58.2.10　厚生省による初の遺骨収集作業（３月５日まで）	昭55～昭59	8		17	5		13	1	44
	昭60～平元	6		11	1		6	4	28
	平２～平６	4		7		6		17	
7.6.23　沖縄戦終結50周年 「平和の礎」建立	平７～	4		2			1		7
	不明	5	1	7			33	1	47
	合計	252	50	94	35	15	107	34	587

参考資料Ⅲ

沖縄戦女子学徒隊

学校名	戦後の通称	動員数		戦没者		学徒隊以外		戦没者計	
		教師	生徒	教師	生徒	教師	生徒	教師	生徒
沖縄師範学校女子 県立第一高等女学	ひめゆり学徒隊	18	222	13	123	3	87	16	210
県立第二高等女学	白梅学徒隊		46		17	8	41	8	58
県立首里高等女学	瑞泉学徒隊		61		33		22		55
私立昭和高等女学	梯梧学徒隊		17		9	4	49	4	58
私立積徳高等女学	積徳学徒隊		25		3	5	25	5	28
県立第三高等女学	なごらん学徒隊		10		1		1		2

沖縄戦男子学徒隊（鉄＝鉄血勤皇隊・通＝通信隊）　－＝不明

学校名	戦後の通称	動員数		戦没者		学徒隊以外		戦没者計	
		教師	生徒	教師	生徒	教師	生徒	教師	生徒
沖縄師範学校男子	師範鉄	24	386	9	226	10	64	19	290
県立第一中学校	一中鉄・一中通	－	254	10	171	7	75	17	246
県立第二中学校	二中鉄・二中通	1	140		115	9	71	9	186
県立第三中学校	三中鉄・三中通	2	344		42		46		88
県立農林学校	農林鉄	10	130	1	23	5	101	6	124
県立水産学校	水産鉄・水産通	2	48	1	31	7	27	8	58
県立工業学校	工業鉄・工業通	7	97		85		70		155
市立商工学校	商工鉄・商工通	－	－		114		43		157
私立開南中学校	開南鉄・開南通	－	－	4	182			4	182

※学徒隊以外の生徒の戦没者数には、兵役で召集された者を含む